

岡山YMCAウエルネスプログラムの展開

「こどもの響生力を育むために」

財団法人 岡山YMCA

総主事 太田直宏

1. 岡山YMCAのめざすもの

私たちが連なる日本YMCAは、100年前の設立当初から「人と社会をより良く変革すること」を使命とする非営利公益団体です。つまり「出会った人の痛みに響きあい、社会構造的弱者と共にある生き方」を推進し、このように痛みに響き応えて「しあわせな社会」を造り出していくことが、YMCAの大切な働きなのです。その働きを具現化する手段としてキャンプなどに象徴される「体験型プログラム」は大変有効な道具であると認識しています。

では、しあわせな社会とは何でしょう？日本基督教団早稲田教会の上林順一郎牧師は、この「幸せ」という漢字を分解して「幸せとは、土と羊から成り立つもの。すなわち、土地とお金を求める生き方である」と揶揄しています。言い得て妙な表現ですが、今の日本の状況を見ても明らかなように、そのような「しあわせ」の在り方は、もう終わりにしなければならないと思います。では、私たちがめざす「しあわせな社会」とは何なのでしょう。それは「『仕合せ』な社会」。つまり、人と人がつながり、痛みや喜びに響き合って、「お互いに仕え合って生きる社会」を再構築していくことだと思います。そのために大切なのは、「私たちが日々出会っている21世紀を生きるこどもたちや若者と真摯に向き合い、その人々の育ちを支援する」という、自分たちの軸足での働きの充実に他なりません。そのような認識のもと、私たちは日々さまざまなプログラムを実施しています。

毎月1回日曜日には、「野外活動友の会」というグループ活動を行い、幼児から小学6年生まで、200名のこどもたちが在籍しています。自然体験や野外料理など楽しい企画がいっぱいです。また年間を通して30回以上のキャンプを実施しており、その参加者は1300名になります。サッカーやバスケットボールなどのスポーツ活動には、300名以上が在籍しています。これらこどもたちの活動を支援しているのは100名にのぼる大学生ボランティアリーダー。こうやって合計すると、年間2000名に近い青少年の成長に関わる仕事をさせていただいていることになり、そのことがわれわれ職員の大きな励みになっています。

2. ウエルネススクール・倶楽部設立の背景経過

「生きる力、わくわく」、02年全国YMCAの新しいキャッチコピーとして採用された言葉です。「生きる力」は、文部科学省のキャッチフレーズでもあるが、あまりにも概念が抽象的すぎます。では、YMCAが考えるべき「生きる力」とは、何なのでしょう。それを私は、「自主性や主体性が豊かで、コミュニケーション能力が高く、人と響き合って生きていこうとする能力」＝「響生力」と呼んでいます。だが、現状はいかがでしょうか。本物体験によってこそ、人間は社会のメンバーの一員としてふさわしい行動の仕方を学び、より良く成長していくはずですが、しかし、最近のこどもたちからは、これらの体験が減少し、結果として、「生きる力」が育まれず、様々な弊害が起こっていると認識しています。具体的には、

①自然接触体験の減少・・・生命の尊厳観の喪失

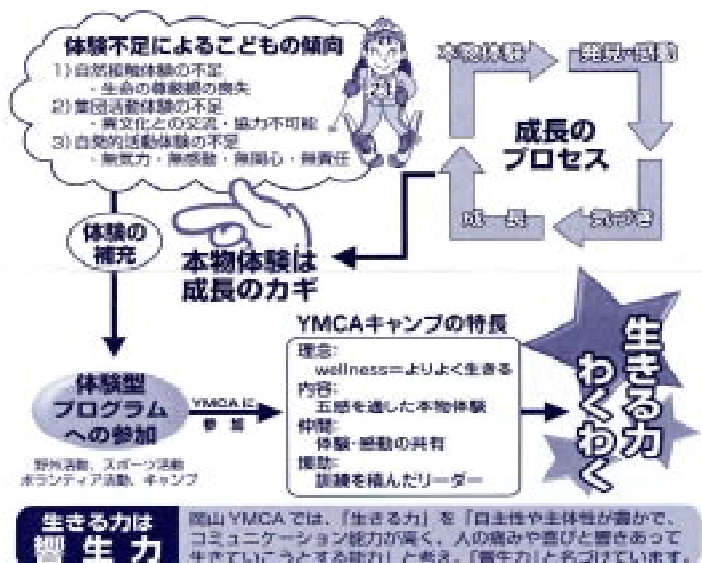
・水族館に行った時、「リーダー、かまぼこってどこにいるの?」と聴かれて驚いたことがあります。また、キャンプに行くと、「虫がいるから嫌だ」という声を最近良く聞きます。しかし、私たち人間は、日々多くの生き物の命を頂き、多くの生き物と繋がりを持って生きています。「私もこの自然の中の一員として生き、生かされている」という思いを持つことはとても重要です。「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いも、自然体験を重ねた子ども達からは発せられることはないでしょう。キャンプや野外活動の中で、自ずと学び取っているからです。

②異年齢集団体験の不足・・・異文化との交流、コミュニケーション、協力が不可能

・地域からガキ大将を中心としたグループが無くなってしまいました。かつてはそのグループの中で、こどもたちは多くのことを学び合い、異なる人と協働する力を獲得してきました。勉強はできるけれども、活動の中でリーダーシップを発揮できる人が減少していることも、このことと関係していると思います。グローバルな時代を迎えるこれからのこどもたちにとって必要なことは、異年齢な人で構成されるグループ活動を体験し、コミュニケーションの力を伸ばすことです。中田英寿選手や松井秀喜選手の成功は、そのコミュニケーション能力の高さも一因です。

③自発的活動体験の不足・・・無気力・無関心・無感動・無責任

・親の管理の下、幼児期からお受験のために極端に勉学に励むこどもがいます。その結果は、誰かに指示されたことはできるけれど、主体的に行動ができないことに通じ、更に進めば、自分のことにしか興味が無く、誰かと共に生きているという生活実感が希薄化していくことにならないでしょうか。マザーテレサは、「本当の貧困は、金銭的貧しさではなく、人の痛みや喜びに無関心である事」と言っています。世界の平和を自ら創り出していかなければいけない子どもたちが、人の痛みや喜びに無関心であってははいけません。司馬遼太郎は、小学校6年生の国語の教科書の教材として著した「21世紀に生きる君たちへ」で、そのことの重要性を繰り返し説いています。主体的行動から何かを実現させた経験者は、夢を持ち続ける事ができます。

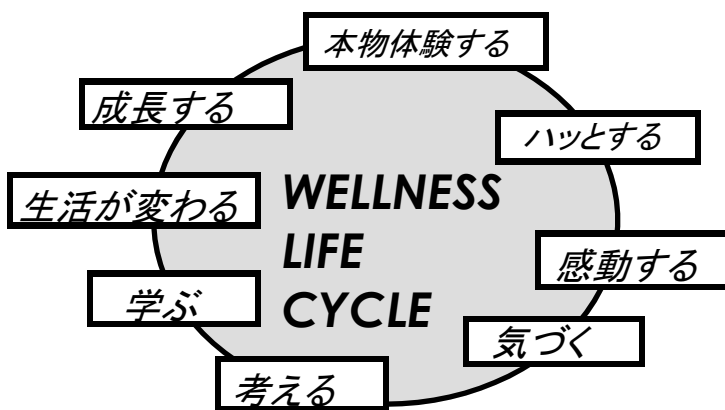


YMCAでは、このような状況を憂い、前述のようにさまざまなプログラムを提供しています。どの活動も、こどもたちに不足している本物体験を補完することを大切に考えていますが、近年のこどもたちの様子を観察する中で、よりこれらの事柄を強調した企画の必要性を感じました。そこで日帰りのディキャンプという形に注目し、2000年に、シーズン毎の「ウェルネススクール」を開始しました。また、2年後にはそれを日常化するために、月1回ごとに実施する「ウェルネス倶楽部」をスタートさせることとしました。

3. ウェルネススクール・倶楽部の活動について

ウェルネススクールならびに倶楽部は、様々な本物体験をすることにより、そこから生じる気づきをもとに「響生力」を身につけ、「より良く生きる」ことを自ら選び取りとることを目的としてプログラムです。大切にしていることは、本物体験を通して、

- 1) 自ら行動する、
 - 2) 他者と共に考える、
 - 3) 構造的に弱者としてされている人々・事柄について気づく。
- という3点です。



そのような視点でさまざまなプログラムを企画してきました。具体的に実施した活動は、異文化理解、環境、福祉、平和、人権、ジェンダー、コミュニケーションなどの視点にたったもので、例えば「沖縄エイサー体験・イルカとスイミング・街のユニバーサル度調査、ゴスペルワークショップ、手話を学ぼう、野草を食べよう、街頭募金体験」などと内容は多岐に渡っています。

開始当初は参加者も少なかったのですが、年月を重ねるなかで徐々にメンバーが増加してきました。これはひとえに質の高いプログラムの提供を心がけてきた結果と評価しています。また、一貫して近隣教育委員会から協力をいただき、後援をいただくことで、小学校の現場でチラシを配布していただくことを継続してきたことも大きな要因です。04年の夏からは、倉敷市教育委員会の後援もいただき、参加者数が飛躍的に増加しました。

4. 事例報告

①ユニバーサル調査プログラム

街のユニバーサルデザインをテーマに活動を行った時は、実際に自分たちで車椅子に乗ったり、擬似高齢者体験グッズを身に着けたり、アイメイト（盲導犬）と一緒に歩いて街を調査しました。YMCAのサポートクラブである国際奉仕団体である「岡山ワイズメンズクラブ」の協力の下、その結果を同じくメンバーである岡山市長萩原誠司氏（当時）と岡山市議会議員太田正孝氏に届けたことで、岡山市政が動き、岡山YMCAの隣接公園のトイレが改築され、公園全体が岡山市のモデル公園となったという経験をすることができました。こどもたちの思いが社会をも変革することができるという手応えをも感じました。

②病院訪問プログラム

クリスマスには、近隣の病院に行き、讃美歌を歌い、ハンドチャイムを演奏します。日頃こどもの声が響くことのない病棟で、クリスマスの日に天使たちの歌声が満ち溢れるのです。讃美歌を聴いてお年寄りが涙を流します。認知症の方が笑うのです。03年のクリスマスには、病院に私の所属する日本基督教団岡山教会の信徒の方が、危篤状態で入院しておられました。もう意識も混濁しておられたのですが、こどもたちの言葉に反応して、なんと手を握りしめ、ほんの一瞬ですがニコリと笑われたのです。その夜、その方は天に召されましたが、大変良い顔をされていたそうです。ご家族は今もその時のことを「うれしかったよ」と涙ながらに語られます。こどもたちを通してそこに何か働いてくださったのでしょうか。お医者さんや看護婦さんは、これを「クリスマスの奇跡」と呼んでいます。その病院には「ホスピス病棟」もあります。みなさんならそこにいる患者さんにどんな言葉をかけますか？あるこどもは「心豊かな毎日を過ごしてくださいように」とカードに書きました。驚きました。こんな言葉を紡ぎだす事ができるこどもたちは響生力に満ち溢れていると実感しています。

③メディアリテラシー向上プログラム～「映画を創ろう」

文部科学省の「学校保健統計調査」によれば、児童・生徒の体格は、一部の年齢を除いて前年度を上回るか横ばいで、体重は多くの年齢で過去最高を記録しています。また、視力の低下傾向が続き、「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、小、中、高等学校で過去最高となりました。情報機器に囲まれた環境は、「目に悪い」「部屋の中に閉じこもる」「勉強の邪魔になる」といった情報化の影の部分としてとり上げられがちです。確かにそういう面があり、情報機器と接する時間、方法などを考えていくことが必要があるでしょう。

しかしながら、一方では、情報機器を有効に使うことにより、知的好奇心をより広げ、深めていくことが可能になり、ひいては科学技術への興味を高めることになる光の部分が大きいことも確かだと考えます。何回も試行錯誤を繰り返す機能や今までに創造された情報を蓄える機能など情報機器の持つ利便性を活用することにより、人間の創造空間を今まで以上に広げることが可能になっています。

また、インターネットや電子メールを利用しているうちに、多様な情報に出会い、思いもよらぬ文化や生活、自然の情報、科学や産業などにふれ、新たな好奇心を開かれ、それらが彼らの中に新しい行動への目的を形づくることもあるでしょう。情報化の進展に対応する教育を考えるにあたって、情報化の影の部分のもつ問題を解決すると同時に、光の部分をそれ以上に輝かせる必要があると思います。また、一人一人が情報の発信者となる高度情報通信社会においては、プライバシー侵害、著作権侵害、名誉毀損、わいせつな性表現、「ハッカー」などは許されないなどの情報モラルを、各人が身につけることが必要であり、こどもたちの発達段階に応じて、適切な指導を進める必要もあります。それと同時に、情報化の影響とそれへの適応をはじめ、批判力の育成や情報化社会の中での生き

方など、「情報化社会を生きる」のための教育が必要となってきています。

そこでウエルネス倶楽部では、03年より「映画を創ろう」という活動を実施するようになりました。これは映画のシナリオ作成・出演・演出・撮影・録音・編集まですべてこどもたち自身で行うというもので、こどもたちにも大変人気の活動でした。こどもたちのモチベーションをあげるためにも、コンクールに作品を出品することをめあてとし、03年度は福武キッズ映像コンテストに、04年度はNTTフレッツビデオメールコンテストに作品を提出しました。結果は両年度とも賞をいただき（03年度準グランプリ、04年度ナイスビデオメールで賞）こどもたちは大喜びでした。

実際にはわずか1日だけの活動ですので、十分な中身であるとは言いがたいものがあります。しかし、これはあくまでスタートに過ぎないという認識ですので、この活動の楽しさを伝えることが一番の目標でした。そうすれば、日常的にこのような活動を行い、表現することが得意なこどもたちが増えてくるはずです。そこで、「何をテーマにするか」、そのお手伝いだけを大人はしました。たったそれだけの動機付けで、こどもたちは実に生き生きと、そしていとも簡単にデジタルビデオやコンピュータを操り、われわれ大人がびっくりするような作品を創りあげました。その様子はあたかも鉛筆を使って紙に絵を描くが如きでした。もちろん編集技術や、映像としての質の高い作品は他にもたくさんありましたが、審査員の方々の心を捉えたのは、こどもならではの感性が作品に満ち溢れていたからでした。

特に2年目となった04年度は、プロとして活動されている映像プロデューサーや新設された岡山県立図書館のメディア工房のスタッフのみなさんの全面的な支援もいただき、より楽しく有意義な活動であったと自負しています。彼らにとっても鮮烈な体験だったようで、なお、この作品は岡山県立図書館監修の「デジタル岡山大百科」の県民提供情報としても常時掲載されています。

5. ウエルネスプログラムから生みだされたもの～響生力の広がり

今やウエルネススクール・ウエルネス倶楽部は、その枠組のなかに留まることなく、さまざまな形で社会へと広がってきています。沖縄ワンピースキャンプには、岡山市のみならず、倉敷市や海を越えて四国の高松市からも参加者が与えられ、40名もが集まるようになりました。また落書き調査ならびに消去活動は、多くの市民を巻き込み、国体を控えて県民運動にまで発展しました。そして、その一連の動きが評価され、05年に全国社会福祉協議会主催で実施されたボランティア市民活動コンクールで、その活動のユニークさから、優秀賞をいただきました。

①沖縄プロジェクト

9.11事件を契機に始めた一連の「沖縄を知ろう」プログラムは、その後こどもたちの思いを汲み取って、「沖縄わんぴーすキャンプ」へと発展し、現在に至っています。まず、00年12月のウエルネススクールの中で、沖縄の問題を取り上げました。沖縄料理を食べ、カチャーシーを踊り、楽しい沖縄を満喫した後は、沖縄戦や米軍基地のことを学びました。こどもたちは、「日本は平和だと思っていたが、そうではない」「是非沖縄に行って自分の目で確かめたい」と口々に語りました。

そこで、ボランティアリーダーたちと相談の上、01年の夏「ひとりひとりが平和を造り出すわんぴーすになろう」というねらいで「沖縄わんぴーすキャンプ」を行いました。沖縄YMCA・ワイズメンズクラブの協力の下、岡山・香川・沖縄のこどもと指導者総勢40人

が、今帰仁のマリンブルーの海で思う存分泳いだり、エイサーを踊ったりして、沖縄を大好きになりました。その後、沖縄本島内を移動しました。嘉手納基地を安保の丘から望み、フェンス1枚で隔てられて異国とされた土地を見、耳をつんざく戦闘機の轟音に衝撃を受けました。また、集団自死のあった場所として知られるチビチリガマを知花昌一さんに案内していただきました。あるこどもは、知花さんの「先祖が地上戦を体験したことを踏まえた反戦地主」という生き方に触れ、「日本は平和だ」という言葉には、沖縄に思いを寄せることができなかつた自分の姿が見えたと言っていました。

その後、佐喜眞美術館を訪問しました。そこは、原爆絵画家として有名な丸木夫妻の「沖縄戦の図」の常設展示館です。壁一面にかかったその絵を前に、誰もが言葉を失いました。美術館の屋上には、階段がありました。まるで天国に続くかのような階段を上りきると、そこに見えたのは……。天国どころか、広大な普天間米軍基地でした。無力感に襲われました。しかし、そんな私を勇気づけてくれたのは、「私たちは沖縄の痛みを忘れない。私たちが平和を造り出すワンピースになる！」というこどもたちの感想だったので。そう、響き力があれば、そこに希望はあるのです。そしてその希望は失望に終わることはありません。そんな子どもたちが、ここ岡山YMCAで育まれておることを心から嬉しく思っています。

②中心市街地落書き一斉調査・消去プロジェクト

「今日もいい天気ですね」「いやあ、先日はありがとうございました」「これお礼にみなさんで召し上がってください」最近、YMCA周辺の方々からよく声をかけていただくようになりました。そのきっかけは、岡山市の中心市街地であるYMCA周辺での一連の落書き調査ならびに消去活動にあります。「ウエルネススクール」「ウエルネス倶楽部」の活動を皮切りに、瀬戸山陰部YMCA&ワイズメンズクラブ共催の「わいわいフォーラム」、中央青少年団体連絡協議会から助成をいただき、地域の諸団体と実行委員会を立ち上げ実施した中高生100人との活動などなど、実に多数の実績を他団体と共に積んできました。それらの事柄が、YMCAは良い働きをしているとの地域の方々からの評価となって、定着してきたのだと感じています。

「難問解決ご近所の底力」というNHKの番組で取上げられたほど、岡山は「日本一の落書き県」といわれていました。なぜ落書きは増加するのでしょうか。私たちと活動を共にしてくださっている岡崎久弥さんは、そのような状態を憂慮し、市民の手で「落書き調査隊」を組織し、独自に調査活動を行った結果、空洞化と高齢化による地域の自治能力の低下と街への社会的無関心の増大が、様々な「スキ」を生み、それが、落書きとして目に見える形ではびこり、重犯罪の温床となっていることを発見しました。まさに落書きは、放置され疎外された街の悲しい叫びだったのです。

この叫びを放置してはいけない、そんな思いから、YMCAを含む多くの市民が動き出しました。落書き調査隊を中心に岡山市中心市街地の落書き調査が行われ、その惨状が徐々に明らかになりました。その報告をもとに、みんなが知恵を出し合い、どのように消去していくのか、費用は誰が負担するのか、ボランティアをどうやって集めるのかなどなどが話し合われました。そんなさまざまな困難な状況を乗り越え、今や岡山市は、「落書き対策先進都市」といわれ、人々が協力しながら、喜んで落書きを消すようになりました。これは、「岡山方式落書き一斉消去」と呼ばれ、現在では東京下北沢や大阪アメリカ村など全国規模で展開され出しています。しかしながらこのノウハウ、元はといえば、落

書き被害の甚大さに痛みを感じた、町内会の会員や、こどもたち、ボランティア、警察官、自治体職員、マスコミ関係者から議員に至るまで、広範な市民が、まさに全身ペンキまみれになりながら、試行錯誤のなかで生み出したご近所の妙案なのです。また「らくがき戦隊ケセルンジャー」というご当地ヒーローも生み出されました。このことを仕掛けたのもNPO法人です。地域で行政・住民とNPO団体が連携して街づくりを行っていく、そんな風土が岡山に今、生まれつつあります。

05年2月には、岡山県知事の肝いりで、「岡山方式落書き一斉消去」をマニュアル化するお手伝いをしました。その結果「まちから、落書きが消えた！～わたしもあなたもできる落書き消し」という冊子を岡山県から発行することとなったのです。これを受けて、市内のPTAや市民団体がこの活動に取り組み始めています。

実際私が、娘たちの通っている岡山市立宇野小学校のPTA会長をつとめておりますので、このマニュアルの実践事例第1号として、2月5日にPTA独自企画で小学校区内の落書き調査活動を実施しました。当日は親子連れ100名の参加があり、岡崎隊長やケセルンジャーも加わり、わいわいがやがやとにぎやかにみんなで調査を行いました。その結果をマッピングしてみたところ、はっきりと重犯罪との相関関係があることもわかりました。

(実は近隣地区で殺人事件まで起こっていたのです) こどもたちは口々に、「これはいけないことだ。是非僕たちの手で消したい」と話していました。この気持ちをくみ取らなければならないとの思いが大人たちの胸に生じました。そこで年度が替わった4月に今度は消去活動の企画をたてました。この経過の中では反省すべき点もありました。それは、いつの間にか地域の方々の姿が見えず、ボランティアだけが目立つようになってしまったことです。結果として、地域住民の「自分の地域は自分で守る」という意識の欠如に繋がっていました。そこで6月に実施した消去活動では、町内会や地元の大学、中学、児童養護施設や学童保育などさまざまな方々に声をかけ、趣旨を説明することを徹底しました。結果的には、実に大勢の方がこの企画に賛同し、共に汗を流してくれることとなりました。あくまでこどもたちが主役でありながら、危険な個所は大人が消す、刷毛やローラーの正しい使い方を高齢者がこどもたちに伝授するなどなど、思ってもみなかった交流がそこで行われたのです。また行政や企業のサポートもうれしい誤算でした。主に河川敷の橋脚を中心に活動を行いましたので、国土交通省やJRが全面的にバックアップし、資材提供をしてくれたり、足場の確保や草抜きなどの事前準備に大いに関わってくれたのです。生憎の雨模様の中でしたが、すべての活動が終わったあとのひとりひとりの爽やかな笑顔は、「共感とは共汗である」ことを証明していました。見学に来ておられた大阪商工会議所の方々もこのような連携に驚き、ぜひ大阪でも一斉消去をと意気込んでいました。

今年、岡山では国体が実施されます。このビッグイベントに向けて、大勢の人々が動き始めています。YMCAでも従来より実施してきた高校生ボランティアスクールをより発展的に企画し直し、岡山教育委員会や青年の家、ジュニアリーダーともタイアップして、町内会のサポートを得ながら、中心市街地一斉落書き消去活動を行いました。

また岡山県では、岡山市内全域を市民と共に落書き消去を行う「史上最大の落書き消去作戦」を企画立案中です。もちろん製作されたマニュアルが大いに役立っています。またこのマニュアルは電子情報化されて、岡山県のホームページに掲載されています。「落書き消去の手引き」という動画資料も製作され、こちらは岡山県立図書館の県民提供情報というコーナーに掲示されています。いまや全世界どこにいてもインターネットに接続できる環境さえ整えば、誰でもこのノウハウを手に入れることが可能なのです。はじめは誰も

見向きもしなかったこの活動が今や県民運動となり、世界に向けて動き始めています。

このノウハウが確立されていくなかで、いくつかの発見がありました。ひとつは、この作業を通して、地域が再生していくということです。綿密な事前調査は言うに及ばず、人様の壁にペンキを上塗りするには事前の許可が必要だったり、予想以上の手間がかかります。ですが、「ひたすらお願いして消させていただく」という、謙虚さが問われる準備の中で、そして共に汗を流しながら、協働作業に取り組むことによって、地域との交流が生まれ、顔の見える関係が再生してきたのです。

もうひとつの発見は、子どもや若者が落書き消しを楽しむ姿でした。青少年が傷ついた街を、汗を流して楽しく修復した結果、「ありがとう、うれしかったよ」と言ってくださる地域の方々に出会います。「自分たちの街は自分たちが守る」という気づきが芽生え、消した壁を気にして見ることで、その自覚を新たにします。「自分たちは、微力だが、無力ではない。しっかりとした目を持って行動すれば、絵本スイミー（レオ＝レオニ作）の主人公たちのように力を発揮することができるのだ。」と彼らは自ら気づいていきました。これは何よりも得がたい体験学習ですし、そこから得られたものは響生力に他なりません。ウエルネススクールやウエルネス倶楽部のメンバーだけではなく、岡山に住む多くの人々に響生力の大切さをお伝えできるようになった状況を心から喜んでいきます。

この一連の活動は、全国社会福祉協議会主催の05年度全国ボランティア市民活動コンクールで、全国から応募された100例のなかから4つの優秀賞ひとつとしてと認定され、表彰していただきました。

5. まとめ

P.F. ドラッカーは、その著書『非営利組織の経営』のなかで、「非営利機関は、良き意図を持って良いことをしたいというだけでは十分ではない。成果を上げ、人と社会に変革をもたらすために存在している。したがって、まずとりあげなければならないのは、いかなる使命を非営利機関は果たしうるか、いかなる使命は果たし得ないか、そしてその使命をどのように定めるかという問題である。」と、明確で適切な使命と具体的行動計画策定の必要性を説いています。ドラッカーはまた、「使命の表現は、それに基づいて現実にごけるものでなければならない。そうでなければ、単なる良き意図の表明に終わってしまう。使命の表現はその機関が現実は何をしようとしているのかに焦点を絞ったものでなければならない、その組織にかかわる一人一人が、目標を達成するために自分が貢献すべきことはこれだ、といえるものでなければならない」としています。

YMCAは、世界平和に貢献することのできる人を育成する、つまり人間教育を目指している団体です。教育とは”education”。その語源は、ラテン語のeducareです。eは「外へ」、ducareは「引き出す」。つまり、人間一人一人が持つ可能性、すなわち、社会が無意識のうちに内蔵する可能性を、意識的に引き出す事にあると言えます。

その意味でも、家庭の危機・社会の危機を迎えている21世紀に、わが岡山YMCAは、地域にあって「平和で仕合せな社会」システムを作り上げていくための働きを推進していく責任があると認識しています。こどもたちひとりひとりを、ウエルネススクール・ウエルネス倶楽部という道具を使って変革しながら、結果として社会の変革に寄与していくために努力を重ねてきたと自負しています。

21世紀を生きるこどもたちが、様々な体験を経て、響生力豊かな人として成長し、やがて仕合せな社会を造り出すことに希望を持って、これからも活動を行っていきます。